

統合医療による 認知症 Gold-QPD 育成講座の役割と将来展望

一般社団法人常務理事

学校法人後藤学園 中医学研究所所長 兵頭 明

2012年の敬老の日に総務省は65歳以上人口が3074万人、70歳以上が2256万人、75歳以上が1517万人、80歳以上が893万人との推計を発表しました。そして8月24日には、厚生労働省の新たな推計により、認知症高齢者は現時点ですでに305万人に達していることがわかりました。これは65歳以上人口の10人に1人にあたり、2020年には400万人を超えるとの新しい予測も提示されています。

一般社団法人老人病研究会は、このような超高齢化時代の医療的・社会的ニーズにもとづき、高齢者の健康長寿のサポート、健康寿命の延伸、高齢者の不定愁訴の改善、そして認知症の予防と改善を目的として、神経内科、精神科・脳神経外科の専門医との連携により「認知症 Gold-QPD (ゴールドキューピッド) 育成講座」を開催し、認知症専門鍼灸師の育成を行なっています。

本育成講座が育成しようとする認知症専門鍼灸師は、認知症や高齢者の不定愁訴に対する高度な西洋医学的知識を備え、さらに中医学(中国伝統医学の略称)の考え方を共有し、認知症の方や高齢者への接遇介護法を習得し、所定の鍼灸技能(三焦鍼法)を有する専門鍼灸師です。具体的にはブロンズコース、シルバーコース、ゴールドコースの3段階の研修プログラムを実施し、認知症 Gold-QPD 育成講座・認定評価委員会が指導監督することにより、優秀な認知症専門鍼灸師の育成を行ってまいりました。

本育成講座のゴールドコース研修生は現在、在宅・高齢者入居施設・通所介護施設・鍼灸治療院にて認知症の方、および多くの不定愁訴を訴える高齢者に対して鍼灸による全人的総合的なアプローチを行なっています。そこで求められるのは、施術環境の違い

に応じた適切な対応であり、医療連携、施設連携、家族連携をベースとして実践された数多くの症例報告が老人病研究会に寄せられています。その一部の症例報告は、在宅・高齢者入居施設・通所介護施設・鍼灸治療院でのそれぞれのアプローチとして鍼灸医学関連の専門誌で連載報告が行われています。

認知症は現在の医学では治せないかもしれませんが、鍼灸による全人的総合的なサポートによって認知症の方の人格の尊厳を守り、一定程度ではあるが認知機能の維持または改善、周辺症状の緩和、ADLの改善、QOLの向上をはかることは、症例報告から見ても一定の範囲内で可能だと思われます。

日本は現在、世界一の超高齢社会になってしまいました。健康長寿の考え方をベースとした統合医療による認知症の予防、認知症の中核症状の改善や周辺症状の緩和を目的とした医療連携、地域連携、施設連携、家族連携といった各種連携の中での鍼灸治療の取り組みは、世界初の試みとなることでしょう。一般社団法人老人病研究会としては、多くの高齢者入居施設、グループホーム、通所介護施設、病院等との連携を創出することにより、本育成講座の参加者が連携をベースとした充実した実地研修を行い、そして多くの認知症の方や不定愁訴で苦しむ高齢者に対して献身的にサポートができるように、全国規模での研修協力施設の拡充をはかる準備を進めております。種々の連携の中で、認知症にかぎらず高齢者のかかえる不定愁訴全般に対しても、全人的総合的なサポートができる多くの認知症専門鍼灸師を育成するとともに、彼らが近い将来において広く高齢者医療をサポートし、活躍、貢献できる環境を整えていきたいと考えております。